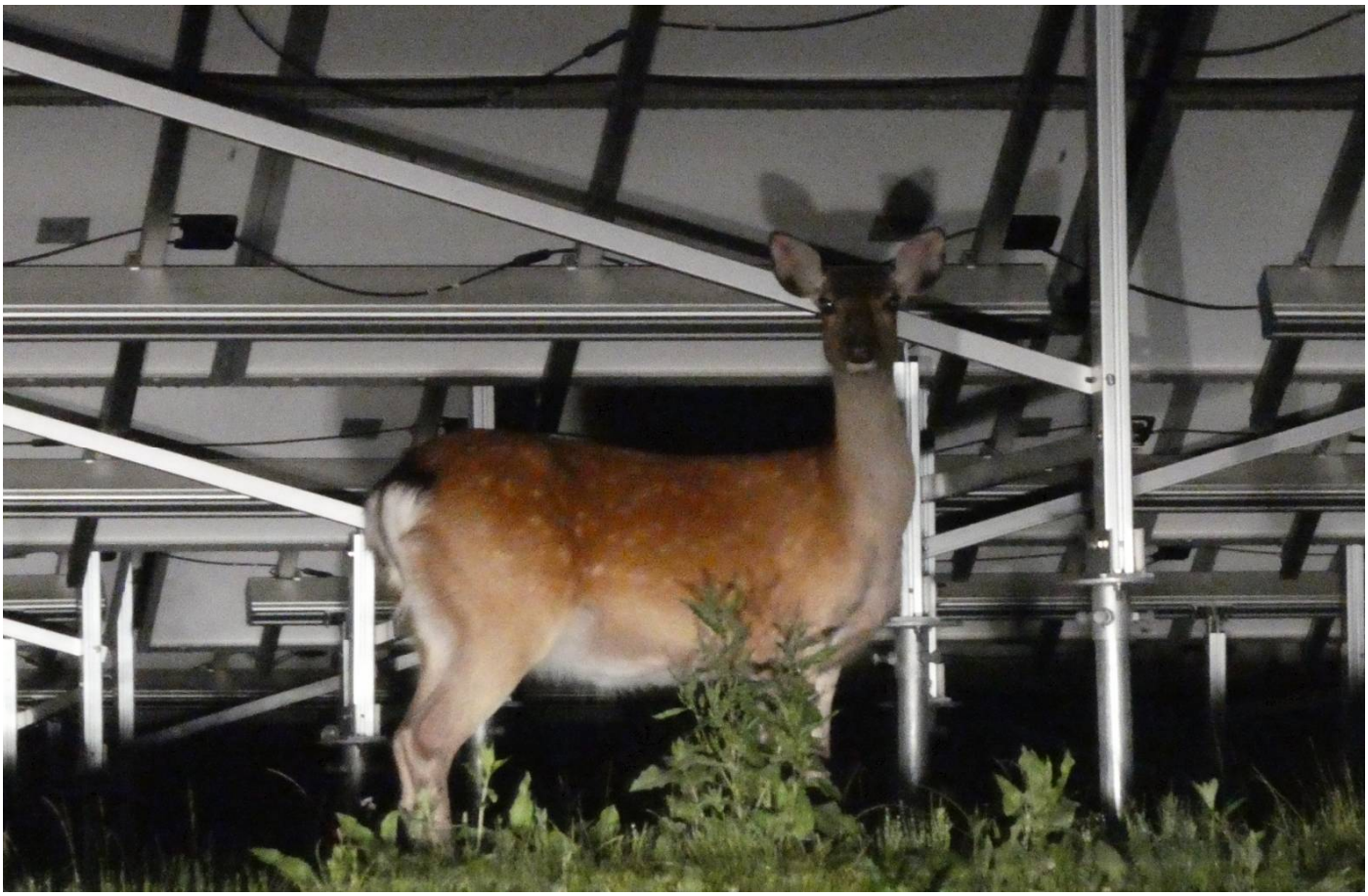
2026_0702「太陽光パネルとニホンジカ」日々の理科 4344 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

北軽井沢の太陽光発電所のパネルの下で、夜間に餌を探していたニホンジカです。一見すると成獣のメスに見えますが、体側には幼獣特有の「鹿の子模様」の白い斑点がまだ残っています。ニホンジカの子ジカは、生まれた直後から全身に白い斑点があり、成長とともに次第に消えていきますが、個体によっては翌年の初夏頃まで淡く残ることがあります。この個体もその特徴が見られることから、昨年生まれの約１歳の若いシカである可能性が高いと考えられます。また、頭部に角が見られず、体つきも細身で首がすらりとしていることから、メスである可能性が高いと推定できます。

ニホンジカは春から夏にかけて栄養価の高い若草を盛んに食べます。太陽光パネルの下は定期的に草刈りが行われる一方、新しい草も次々に生えてくるため、シカにとっては採食しやすい場所となっています。昼間は人の出入りがある場所でも、夜間になると安心して姿を現し、パネルの支柱の間をゆっくり歩きながら草を食べる様子が各地で見られるようになりました。この写真でも、ライトに照らされながらこちらを見つめる表情には、まだ若い個体らしい警戒心と好奇心の両方が感じられます。

近年の北軽井沢では、広大な太陽光発電所の建設が相次ぎ、牧草地や雑木林の景観が大きく変化しています。再生可能エネルギーの導入は重要な取り組みですが、その一方で、野生動物の行動や利用する環境にも少なからず影響を与えていることがうかがえます。人工物の下を新たな採食場所として利用する若いニホンジカの姿は、人間の土地利用の変化に適応しながら生きる野生動物のたくましさを示すと同時に、自然環境と開発との調和について改めて考えさせられる一枚でもあります。

（2026 年６月下旬／北軽井沢）